

原典を読み

近頃は生命倫理関係の文章を発表することが多いが、私の本来の専攻は、科学史、特に生命科学・医学を対象とした思想史である。卒業研究の指導教官だったのは、日本を代表する科学史家のお一人である村上陽一郎先生だったから、科学史研究のトレーニングをまったく受けなかったわけではない。しかし、当時の興味はむしろ科学哲学にあり、また、大学院では進化生態学を専攻したので、実態としては、「独学」で科学史の研究法を身につけたに近い。独学の内実は、(1)先輩・同輩・後輩(米本昌平・金森修・小松美彦・斉藤光・小松真理子・松原洋子・堂前雅史・坂野徹・森幸也・林真理さんたち)との読書会や研究会と(2)川喜田愛郎(1909-96)・フーコー(1926-84)・長野敬(1929-2017)・筑波常治(1930-2012)・中村禎里(1932-2014)・鈴木善次・グールド(1941-2002)といった先達の成果との知的格闘になる。

そうして学んだことのうち重要度が高いのは、中村先生とグールドの諸著作を通して身につけた、「歴史研究はとにもかくにもまず一次史料に目を通す」という習性——歴史研究において当たり前過ぎることだが——であろう。講義・解説書は分かりやすい形に変えた上で伝えられる。しかし、思想史の一次資料に目を通すと、紆余曲折しながら諸々の考察が繰り広げられており、解説書に書かれているほど明確ではない。解説に甘んじず、原典自体を紐解くべきなのである。グールドの科学史のエッセーは、

一般的知識と原典のあいだにある落差を印象づける事例に満ちている。

中村先生とはその後知遇を得て、口頭でもいろいろ教わった。知り合いの書籍を読むことが多くなると、書籍で知った知識か、口頭で得たのかが分からなくなりがちであるが、中村テーゼについては書籍中に探し出すことができた。

研究を志したら、その晩から研究対象の原典(日本語訳でも英訳でもよい)を読みはじめること。通史や概説はいくらよんでもきりがない。仕事が軌道にのったと感じてから読めばよい。その上、それらは所詮他人の科学史である。自分の科学史は、自分で対象と格闘しながらつくりあげていくものだ。それに加えて、できるだけ専門的な書籍や雑誌論文を読め。また研究にふさわしい条件に恵まれていないと、つい一日一日のばしのばしして事が始まらなくなる傾向がある。くりかえすが、その晩から読みはじめる。原典が手許になければ、直ちにその夕方買いに行くか、あるいは発注する。これが私の体験にてらしても重要である。(中村禎里『十七世紀の生物学』『科学史研究』101:1-9, 1972年から)

その後の研究者生活で、上記が私の指針であり続けてきた。

とはいえ、あるテーマに関する原典情報を得るには、やはり、概説書等々、いろいろあたら

なければならぬ。現在、免疫学史の小文をも
のする仕事を抱えている。科学思想史家として
は、免疫に関する原初の思想・観念・概念をお
さえておきたい。多くの専門書はジェンナー
(1749-1823) の種痘から始まり、それ以前の情
報は乏しい。そこで渉猟すると次のような大同
小異の記述群にいきあたる。

当時カルタゴ軍がギリシャ植民地を次々と攻
略していたが、特にシチリア島のシラクサの
攻防戦は二度にわたるものでありました。は
じめのカルタゴ軍とシラクサ防衛軍との戦い
は熾烈をきわめたが、ペストが発生し、両軍
とも大きなダメージを受けて、カルタゴ軍は
撤退しました。/それから八年後、カルタゴ
は再びシラクサを攻撃してきました。しかし、
再び戦線にペストが流行したのです。このと
き八年前のペストを経験し、生き残っていた
シラクサ防衛軍はペストに対しほとんど無傷
であったが、新しく部隊を編成したペストの
経験のないカルタゴ軍は、八年前と同様大被
害を被り敗退したのです。/このペスト流
行の時期（紀元前五百年）はトゥキディデ
ス（ツキジデス）の「戦記」に記載されてい
ます。（菅野雅元「古くて新しい免疫学」広
大フォーラム 346（1998.10.1））

ギリシャの歴史家で『戦史』の著者として有
名なトゥキディデスによりますと、ギリシャ
の植民都市国家であったシチリア島のシラ
クーザとアフリカのフェニキア人国家カルタ
ゴとの間で戦われた紀元前 45 世紀頃の長年
の戦の最中、戦場で天然痘が発生し中断され

たことがありました。再度の戦になったとき
新兵中心のカルタゴ兵が大きな被害を受けた
のに比べ、以前の天然痘の感染から回復した
シラクーザ兵士は再度の感染を免れ戦に勝利
したという事実が記載されております。（本
庶佑「獲得免疫の驚くべき幸運」『稲森財団：
京都賞と助成金』2017、154-189。引用は
154）

本逸話の言及者は医師が多いようである。免疫
学者をはじめとする医師の間では広く流通して
いる話なのかもしれない。

思想史家としては、当然、原典を読まなけれ
ばならない。だが、どれも『戦史』としか記さ
れていない。やれやれ。通読し直さなければな
らない。

確かに、免疫に関わる記述はあった。

疾病から命をとりもどしたものは、死者
や病人にたいして深い憐みを禁じ得なかつ
た。かれらはその苦しみが如何ばかりのもの
かを既に体験しているのと同時に、今は自分
たちは安心できる状況に復していたからであ
る。一度罹病すれば、再感染しても致命的な
病状に陥ることはなかったのである。（トゥ
キディデス『戦史（上）』久保正彰訳、
岩波文庫、1966 年、239 頁）

獲得免疫という言葉こそ使われていないもの
の、紀元前 5 世紀の時点で、ある感染症に罹
たら二度とそれにはならない現象に気づいて
いる人はいたのである。

だが、これはギリシャ・シチリアーカルタゴ

戦、つまり第二次シケリア戦争（紀元前410-同340年）の文脈ではない。紀元前430年頃に流行った、ギリシャ内のスパルタ陣営－アテナイ陣営戦＝ペロポネソス戦争（紀元前431-同404年）における感染症、いわゆる「アテナイの疫病」の話である。シケリア戦争時の逸話については一向に見つけられない。

待てよ。考えてなおしてみると、そもそもおかしい。シケリア戦争において、連続する2度の戦いでともに感染症が流行り、結局はカルタゴが敗れたという話は、カルタゴ軍の第3回遠征時（紀元前406年-同405年）と第4回遠征時（紀元前398年-同396年）のことであろう（確かに8年後だ）。トゥキディデス（紀元前460年頃-同395年）の『戦史』は、ペロポネソス戦争の紀元前411年（!）までの記録である。時代錯誤なのではあるまいか。なるほど、死亡の詳細は不明だが、トゥキディデスは紀元前400～395年まで生きていたから、第4回遠征時の逸話について知っていた可能性はある。し

かし、『戦史』に記されている蓋然性は低いと推測しうる。

それ以降、ペロポネソス戦争が終結する紀元前404年までの歴史は、コリントス戦争や「マンティネイアの戦い」（紀元前362年まで）とともに、クセノポン（紀元前427年頃-同355年頃）の『ギリシア史』で扱われる。また、「シケリアのディオドロス」（紀元前1世紀に活躍）による『歴史叢書』の年代誌にも、そのあたりの記述がある。「ひょっとして」と思い、クセノポンもディオドロスも参照してみたが、やはり見つけられない。

悪貨は良貨を駆逐する。証拠が語る史実は、より面白いエピソードに駆逐されかねない。興味深い逸話は語り続けられてしまう——史料の裏付けがなくとも。よく考えればおかしいと気づく話でも。そうした流れに抗するためには、ことある毎に、原典に当たれと言いつけるしかないだろう。



廣野 喜幸（ひろの・よしゆき）

【生年月】1960年2月

【専攻領域】科学史・科学論、実践倫理学、進化生態学

【主たる著書・論文】

廣野喜幸・市野川容孝・林真理編著（2002）『生命科学の近現代史』勁草書房

藤垣裕子・廣野喜幸編（2008）『科学コミュニケーション論』東京大学出版会

廣野喜幸（2013）『サイエンティフィック・リテラシー』丸善

【所属】東京大学情報学環教授（総合文化研究科から流動）

【所属学会】日本科学史学会、日本科学技術社会論学会